



令和 5 年 3 月 24 日

予餞会 98 回生からの贈り物

予餞会で湘南の soul が見えた。98 回生は、勉強・行事・部活動の相乗効果で湘南ならではの挑戦を続け、大きなものを残していった。

1・2 年生には、湘南という巨大な器の中で自分の可能性を信じ、未来に渡って成長し続ける力、真の矜持を身につけてほしい。

- 行事や部活動の楽しさを伝えられる存在になりたかった。
- 行事や部活動を通して、根拠のない自信を培い、勉強をやり抜いた。
- 湘南の行事はみんなで役割を分担し、簡単には進まない仕掛けになっていて、湘南生はこの困難を乗り越えることを楽しもうとするから本当に楽しい。
- コロナ禍で一から新しい行事を創ろうとし、やり遂げた。私たちは可哀想ではない。98 回生として湘南を楽しめたことは幸せであり、誇りに思う。
- 集団を強くするためには、まず相手の話を聞いて理解して、自分の考えを伝えて理解してもらうことが大切。議論する場を用意するよう努めた。
- 中途半端ではなく、何でもいいから一生懸命とことんやること。
- 自分からアクションを起こすこと。
- ハンバーグのように中身がギューギューに詰まった生活を送ってほしい。
- 「最も困難な道に挑戦せよ」は湘南の精神を良く表している。

とことんのめり込もう 2

今年度、湘南から 20 名が東京大学に合格を果たした。第 5 号で紹介した東京大学総長藤井輝夫さんの改革が形になり始めている。2023 年度の一般選抜や学校推薦型選抜など全合格者に占める女性の割合は 22.7%で、過去最高だった。入試担当の藤垣裕子理事は、「志が高く、能力の高い女子が受験してくれるようになってきている。非常にありがたい。高校で先輩の女子が合格すれば、後輩も志願するようになる。ジェンダーバランスのとれた多様性のあるキャンパスを実現したい」。(高校生新聞 2023/03/10) 藤井さんが掲げる「多様性の海へ：対話が創造する未来 (Into a Sea of Diversity: Creating the Future through Dialogue)」が浸透してきたと見るべきだろう。

もともと海が好きだった藤井さんは学部時代の専門課程で、船舶工学を専攻、ちょうど海洋工学コースが新設され、「これぞ自分の進む道」とひらめいたという。(NIKKEI The STYLE 2023 年 1 月 15 日付「My Story」)「大学でもスキューバダイビングに熱中し、小笠原諸島や慶良間諸島で魚と戯れた。在学中の 85 年、沈没したタイタニック号がカナダ・ニューファンドランド島沖の海底で見つかった裏には、海中を探索する潜水艇の活躍があった。海の中はまだ未知の世界で、宇宙と同様に開拓の余地があるとワクワクした。」その後、生産技術研究所で学んでいたころ、恩師に「どんな研究分野でも 5 年間本気でやれば、世界のトップクラスになれるよ」と言われ、海中工学を深く学び、研究の道をとことん突き詰めたい、修士課程で終わらず、博士課程まで行くと決意した。しかし、有能な研究者がいても、最新の設備や器具がないため、実験が滞ることも珍しくない現実があった。東京大学に戻ってから大学経営の道に進んだのは、一人ひとり

の研究者が能力を自在に発揮できる環境を作りたいと思ったからだ。藤井さんは、自由に使える資金を確保するため、日本の大学で初めて公募債を発行した。

「大学はもっと自由に、もっと自在に動いていい。それがきっと、どこか大きなところへつながっている」

麻布高校に在学中から直感を信じて一直線に進んできた藤井さん。東京大学という巨大な船でどんな未来に航行していくのか注目したい。

Pursue your Dream with eternal Optimism「絶対にへこたれない」 1

令和5年3月9日、本校28回生でノーベル化学賞の根岸英一先生の長女 Charlotte Negishi East さんが本校湘南高校歴史館を初めて訪れた。Charlotte さんは展示物に向き合い、とりわけ、根岸先生のコーナーではノーベル化学賞のメダルのレプリカに感嘆した。

翌3月10日、根岸英一記念会が大和市にある高座教会で行われた。根岸先生は令和3年6月6日に85歳で逝去し、パンデミックのため日本での式等がこの日まで延期されていた。喪主である Charlotte さんのスピーチは印象的だった。

○父は研究ばかりしていた訳ではなく、音楽やスポーツに強い興味を持ち続ける多面性があった。父がピアノで奏でる美しいクラシック音楽は私の心をとてとも穏やかにしてくれる子守歌であり毎晩ぐっすりと眠りにつくことができた。ゴルフも熱心で、プロのスイングのビデオを研究していたし、スキーもシーズンには頻繁に出かけていた。

○私が母親になると両親がよく家に来て孫と遊んでくれたり、海外旅行にも連れて行ってくれたりするなどたくさんの思い出をもらった。寛容で優しさにあふれた両親には感謝してもしきれない。

○父は若い世代に「卓越性と永遠の楽観主義」“Eternal optimism and excellence”を養うことに身を捧げていた。これはまさに彼の限りのない向上心と前向きな姿勢を示している。

○晩年は長年連れ添った妻を亡くしただけではなく仕事の自由など自身の死に至るまでにたくさんのものを失ったが、父の掲げた永遠の楽観主義がこれほどまでにぴったりだったことはない。高齢者施設に移った後も身の回りの世話をしてくれる方々や入居者の方々などが父を心より愛し、父は父でその新しい人生に立ち向かい挑戦をしながら出来る限りのことをしていた。周りの方と一緒にピアノを弾いたり歌を歌ったりして毎日を過ごしいつも笑顔絶やさず何にでも興味を持ち、太極拳、バレーボール、ダンス、コーラス、映画鑑賞など挙げればキリのないほど毎日を謳歌していた。このような父を誇りに思う。

2018年に決定した東京大学のキャッチコピー「志ある卓越。」“Discover Excellence.”は、根岸先生の「卓越性と永遠の楽観主義」“Eternal optimism and excellence”の精神に通じているのではないかと。

余談だが、校長室には根岸先生が書いてくれた色紙が飾ってある。

“Pursue your Dream with eternal Optimism.”

“eternal Optimism”は絶対にへこたれないというようなニュアンス。

(「夢を持ち続けよう！」根岸英一著)